
僕らは同じ空の下【DQ3パーティー3rd】

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らは同じ空の下【DQ3パーティー3rd】

【Nコード】

N2395T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

ルイーダの酒場で仲間を探しにきた勇者だが。

dノベ転載

酒場での出会い <1>

「いらつしゃい勇者様。どんな方をお探しかしら？」

酒場の主、ルイーダは来客に笑顔でそう尋ねた。

「盗賊」

勇者と呼ばれた来客、恐らく女性であろう短い黒髪の人物は、ただそう一言答えた。

「……他にご希望は？」

少し面食らいながらも、相変わらぬ笑顔でルイーダは尋ねる。

「とりあえず盗賊。男でも女でもいい」

「……………何で？」

営業スマイルだったルイーダは急に態度を崩した。

「何だ。急に態度が変わったな。まあ、さっきの方が気持ち悪かったが」

「今日があんたの旅立ちの日だっていうから、ちょっと盛り上げてやろうとしたんじゃないのさ。アタシの努力をムダにしてくれちゃって。まあ、いいから話進めるわよ」

「ああ。で、何で盗賊を選ぶか、か。聞いた話だが、盗賊は戦闘もできるし、オマケにお金とかアイテムとか宝物とか見つけてくれて便利らしいじゃないか」

「……妥当な選択ではあるけど……もっとこう正当派にいかうとか思わない？」

「正当派っていうのは何だ」

「……もついいわ。今酒場にいる盗賊さんはあちらのキースさんよ」

ルイーダが指し示した方向を勇者は見た。
そこにはテーブルがあり、白髪が目つきの悪い男が座っていた。
確かに盗賊っぽくて柄が悪そうだ、とは、勇者の第一印象だ。
ルイーダに指し示され、盗賊も不機嫌そうな顔で立ち上がり、勇者に近づく。

「はじめまして、勇者様。ご指名ありがとうございます。俺は盗賊のキースだ」
「不自然。明らかに言わされてる台詞だ」

「お前らの会話全部筒抜けでニコニコしてられるか！俺を道具みたいに言いやがって、その根性が気にいらねえ！」

「気に入らないなら無理に仲間になることはない。私は強制はできないからな」

「バカヤロー！それじゃ俺がここに来た意味がねえじゃねえか！しょうがねえから、お前に付き合っただけやなんだ、ありがたく思え」
「ああ、ありがとう」

「全然心がこもってねえー！」

「そうか。そう聞こえたのならすまない。もともと私はこういう調子でしか話せないんだ。あなたの協力は大いに感謝している」

「……そ、そうか。そう言うならそういうことにしといてやらあ」
「……こいつ、ちよろいな」

勇者はボソリと呟いた。

「まったくね」

ルイーダは密かに同意する。

「おい、今なんて言ったー？！聞こえてんぞ、こらー！！」

「聞こえてるなら改めて言う必要もあるまい」

「~~~~~っ！」

勇者の返しに、盗賊は怒りがたまりすぎて何も言えなくなっただけだった。

さすがにルイーダもまずいと思ったのか、さりげなくフォローを入れることにした。

「まあまあ。それじゃ話も進まないから、あんたもさっさと自己紹介しちやいなさい」

「フォローなのかさっぱりわからないが。」

「そうだな。なにやら話が込み合ってしまったが、私の名前はシェリーという。性格はいつぴきおおかみ、趣味は読書、好きなモンスタ―は笑い袋、好きなアイテムは……」

「そんなトコまでいらないから」

「ああ、そうか。ともかく、これからよろしく、キースさん」

「気持ち悪!!」

キースは肩を抱いて、ザッと後方へ下がった。

明らかに嫌悪の表情を顔に浮かべている。

「……じゃあ、何と呼べばいいんだ」

キースの行動に、少し不快そうな顔をしながらも、シェリーはそう問った。

「呼び捨てでいい。めんどうだろ。俺もお前のことはシェリーと呼ぶから」

「お前に呼び捨てなんて腹立たしいな」

「何それ！ 俺ただ下に見られてんの！ お前何様!？」

「勇者様だ」

「……………」

完敗。盗賊は地面に座り込んでしまった。

さすがにいじめすぎたか、とシェリーは思い、盗賊に目線を合わせて、その肩を優しく叩く。

「冗談だ。こんな私だが、これからよろしく頼むよ、キース」

「……ああ」

キースも、視線は合わさず、不機嫌そうな顔をしていたが、とりあえず返事はした。

「いや、ルイーダさん、いい子紹介してもらった。こいつはいいマ

スコットキャラになる」

「でしょー。かわいいよねー、キース君。アタシも狙ってたんだけどなー」

「……………」

その後の女性達の会話はもう聞かないことにしたキースだった。

このシェリーという勇者には、いくら怒りをぶつけたところで無駄だと彼は悟った。

「さて、仲間は3人まで連れてけるけど、どうする？」

「そうだな……………それじゃあ……………」

酒場での出会い <2>

「次は魔法使いか僧侶がいいな」

「あらまともね」

ルイーダは目を少し開いて、意外そうな声を出した。

「盗賊の選択だって合理的だぞ？」

シェリーはややむっとした顔をしていた。

「……まあ、そうね」

「あと、遊び人が欲しいんだ」

そこでルイーダは一瞬言葉が継げなかった。

「とりあえず魔法使いか僧侶というのはどういうお考えからかしら？」

まず整理してみることにした。

「いや、彼らをレベル上げて、後で賢者にしたら楽かな」と。あとは、やっぱり魔法を使う人がいないと」

「なら僧侶がいいんじゃないの？ 回復役を任せた方が楽でしょ。ってか、遊び人は賢者にしないの？」

ルイーダの言葉を聞いて、シェリーは一瞬考え込むように、口元に手を添えた。

「それならあえて魔法使いにしてみようか。ちなみに遊び人は最後まで持っていく」

「おいっ！」

ここで、今まで成り行きを見守っていた盗賊キースが割って入った。

シェリーはキースを見て、眉根を寄せたその顔で、何だと言っていた。

「あえて苦勞するパーティ編成にすることはないだろう」
キースも負けじとシェリーを見つめ返す。

「大丈夫大丈夫。なんとかなるって。私に任せておけ」
シェリーは淡々とした口調と表情で、キースに向けて手を振って、彼の反論を制した。

こいつは専制君主だ、とキースは確信した。

「魔法使いなら、そちらにエリスさんがいらつしやるわ。遊び人さんは……今エリスさんに話しかけてるセイさんよ」

見ると、奥のテーブルで、ひたすらに楽しそうに身振り手振りを交えて話す金髪の少年と、大きな帽子をかぶった赤いくせの強い髪の女性がいた。

エリスという魔法使いの女性はこちらに気づいたようだが、セイという遊び人の道化服に身を包んだ少年は全く気づいていない様子で話している。

だが、エリスの様子がおかしいのでその視線の先を追う。
もちろんシェリーと目が合う。

何を思ったのか、にこやかに彼はシェリーに手を振った。
しかしシェリーは手招きをする。

エリスが戸惑いながらも立ち上がって、そちらに歩く。
セイもにこやかな表情のまま、エリスについて歩いた。

「はじめまして、私はエリスといいます」
エリスがシェリーの前で腰を折って礼をした。

「あ、僕はセイです。ところであなたは誰ですか？」
「な！ あんたは何を言ってるね！ こちらのお方こそ勇者様よ！」
セイがシェリーの両手を握りながら言う側で、エリスは頭を抱え

て叫んでいた。

シェリーが何も言えずにいるのを、とりあえずキースは黙って見ていることにした。

——俺は無力だ。

もうはや挫折しそうになる自分がいた。

「とりあえず、私が一応魔王退治の勇者として旅立つシェリーだ。どうか私に力を貸してほしい」

「も、もちろんです！」

エリスは顔を上気させて、嬉しそうに言った。

「あなたみたいな美しいお嬢さんのためなら頑張りますよ」

セイはのんびりした口調で答えた。と思うと、後ろで黙って見ていたキースのすぐ前に移動していた。

キースは驚いて、思わず後ろに仰け反ってしまった。

「あなたも勇者さんのお仲間ですか？　かつこいい方ですね。僕はかつこいい男性も好きです。よろしくお願いしますね」

セイは、キースの様子は気にせず笑顔で言った。

「あ、ああ」

キースは気圧されてしまい、それだけしか言えなかった。

「そいつはキースという盗賊だ。……うん、君らはなんか怪しい関係っぽくていい」

「待て——！！」

キースがそこで声を上げた。が、シェリーは聞いていない。

「エリス、あなたと私も怪しい関係に見えるわ。うん、このパーティーならいける」

「何に?!?!」

シェリーがエリスの肩を抱きながら言うと、今度はキースとエリスの声が重なった。

「何をそんなに興奮してるんだ。冗談だよ」

「お前の冗談はわからねえんだよ！ もっとそれらしくしろ！」

キースがやっと自分の出る幕がきたとばかりに言う。

「私はそのつもりだったんだが、伝わらなかったのならすまない」
シェリーは素直にそう述べた。

「……………」

キースは何も言えなくなってしまった。

「あんたらさ、何でもいいから早く出発しなさいよ」
ルイーダの言葉に、皆納得して酒場を出た。

実家

「あら、おかえりなさい、シェリー。今晚は泊まっていくなの？」

家の扉を開けると、シェリーの母が笑顔で迎えた。

「ああ、ちょうど近くに来たから。お金の節約に」

シェリーは、母に対しても他の者と同じような態度で答える。

「お友達も、気を遣わないでくつろいでいてくださいね」

シェリーの母は、キース達にも目を向けて言った。

——お友達……？

この面子を見て、そう言えるのは、やはりシェリーの母だ、と皆が思った。

「ご飯も食べ終わり、寝ることになった。

「おい」

部屋に入り、キースが声を出した。

少し険悪な声だった。

「なんだ」

シェリーは気にした様子もなく、普通に答える。

「どうやって寝るんだ」

シェリーの家は、二階建てではあるがこじんまりしていた。

一階ではダイニングやリビングを区切って、両親の寝所があり、

二階がシェリーの部屋だった。

一人の部屋にしては広く、四人が窮屈には感じない程度である。だが、ベッドが一つしかない。

「ああ。布団があるから大丈夫だ。あれ、ジパングにあったあれみたいにさ。しょうがないだろう。私の部屋だったんだから」

「いや、そうだが……」

キースは、あえて何故布団だけあるのかは聞かなかった。

シェリーはやはり何事もないように対応するため、キースもたじろぐ。

「誰がベッドに寝るんですか？」

セイが、キースが聞いたかった質問を聞いた。

「もちろん私」

——やはり。

キースが思った次の瞬間

「と、キース」

「待てー!!」

シェリーの言葉にすかさずキースがつっこんだ。

「明らかにアレはシングル用ベッドだろ?! 入れるわけがないだろ! だいたい、一緒に寝るって何考えてんだ、お前は!」

「何を今更。私とキースの仲じゃないか」

「知らねえよ! いつそんな気安そうな仲になったんだよ!」

「とりあえずシェリー。明日も早いから早く決めましょう」

キースがさらに熱くなったところで、エリスが口をはさんだ。

「そうだな。遊んでられないな。とりあえず布団を出そう」

シェリーがそう言うのと、とりあえず壁の収納から布団が三つ出された。

とりあえず、部屋には敷けた。

「で、結局誰がベッドに寝るの?」

セイが再び質問をした。

「シェリーでいいだろ。もう……」

「そうか、悪いな」

「悪いな、とか言っつてしつかりベッドに陣取ってるじゃねえか！お前は！ 白々しいんだよ！」

ベッドに腰掛けているシェリーに、キースが怒鳴る。

「とりあえず、もう夜も遅いから寝ましょう。騒ぐとシェリーのお母さんに迷惑だから」

エリスの言葉はいつもの的確に状況をついていた。

そして、皆は静かに床に就いた。

ふと、キースは目が覚めた。

辺りはまだ暗かったから、恐らく真夜中だろう。

もう一度寝ようかと思ったが、何だか目がさえてしまったので、静かに体を起こした。

周りを見ると、ある人物がいないことに気づいた。

シェリーだ。

キースは気になり、静かに立ち上がり、部屋を出た。

一階に下りると、梯子のすぐ横のベッドで母親が寝ていた。

盗賊のキースには、静かに動くことは容易いことではあるが、こんな所でその特技を使うのは妙な気分だった。

とりあえず、一階を見回してもシェリーはいない。

次にキースは、床をきしませないように歩き、静かにドアを小さく開けて外に出た。

すると、すぐ目の前に見覚えのある背中が見えた。

そういえば、自分は戦闘の時はいつもこの背中を見ているな、とキースはふと思った。

キースがドアを開めると、そのかすかな気配に気づいたのか、目

の前にいたシェリーは顔だけを動かして後ろを見た。

「キースか」

「キースか、じゃねえっての。いきなりいなくなったら心配するじやねえか」

キースが憎らしげに、ズボンのポケットに手を入れながら言った。だが、シェリーは何だか嬉しそうに顔を歪めた。

「心配してくれたのか？」

その声は、普段のシェリーとは違い、女性らしく優しく落ち着いたものだった。

キースは顔が熱くなる感覚を覚えた。急に自分がとても恥ずかしいことをしたような気分になった。

「べ、別に、そんなんじゃないよ！」

そう言っても、キースはシェリーに視線を合わせることができなかった。

シェリーがかすかに笑った息の音が聞こえたが、それに反応することもできなかった。

「なあ、キース、ちよつと私に付き合ってくれないか」

「……………嫌だつて言っても、連れてくんだろ」

キースは、嫌そうに、ゆっくりを顔をあげた。

今度は、きちんとシェリーの顔が見れた。

今のシェリーの顔は、いつも見るシェリーの顔だったからだ。

そして、今二人は城下町を出て、外を歩いている。

「おいおい、こんなトコまで出てきていいのかよ。もし魔物に出くわしちまったら……………」

「そう思つなら、静かにしろ」

「……………」

キースは納得いかないがらに、とりあえず黙ってついていくこ

とした。

シェリーに逆らうことも、もはやできないと彼はあきらめていた。

そして、しばらく歩き、小高い丘の上に着いた所で、シェリーは止まった。

キースもならって止まる。辺りへの警戒は忘れない。

と、そこでシェリーから目を離れた時に、急に衝撃が走った。

不意なことだったので、キースはそのままうつ伏せに倒れこんでしまった。

だが、倒れてから周囲を確認してみると、シェリーも隣に倒れこんでいた。

自分の体に触れている、倒した原因を見ると、それはシェリーの手だった。

「何すんだ」

キースは、いつものことだと半ばあきらめた口調で静かに、仰向けに体の向きを変えながら聞いた。

「キース、星がきれいだぞ」

シェリーも同じように仰向けになりながら、明るく言った。

キースはまたそこでも、いつもと何か違うものを感じた。

キースは、また先ほどと同じような妙な緊張感を感じた。

「だから何だ」

つい口調もぶっきらぼうになってしまった。

「つまらない奴だな。たまには自然の美しさを感じ入る心も大事だぞ」

「お前に言われたくねえっての」

そこで言葉が途切れ、沈黙が流れる。

不思議と、居心地の悪さはなかった。

外は、静かなようで様々な音で溢れている。

風が草をなぐ音、虫の声……様々な音が世界に響いていた。
だから、静寂の不安はなかった。

「どうしたんだよ」

だから、キースも素直に言えたのかもしれない。

自然と、口から言葉が出ていた。

「お前の故郷は、どんな所だ？」

疑問に、疑問が返ってくる。

だが、キースは何かを感じ取り、そのまま話を続けた。

「俺に故郷はない。盗賊になった時点で、故郷は捨てた」

「捨てても、記憶は残るだろう」

「……捨てたつてことは、思い出さたくないつてこともある」

「人の事情は色々つてことか」

「お前だつて、言いたくないことぐらいあるだろう」

「何が言いたい？」

「お前の父親のこととか」

「……そうだな」

「正直、お前、自分の父親のことをどう思ってるんだよ」

「……よくわからない」

「どういうことだよ」

煮え切らないシェリーの声に、キースは少し苛立ったような声を
出した。

やはり、こうして話をダラダラする性格ではないな、とキースは
思っていた。

「私には兄がいた。最初はその兄が父さんの跡をついで、勇者とし
て旅立った。だが、定期的に届いていた手紙が突然切れた。人々は
焦っているのだろう。だから今度は私が選ばれた。勇者を追える者
は、勇者しかいない。私達はそうなるべくしてなった。……なんて、
納得してると思うか？」

そこでシェリーは皮肉げに笑った。

やっと本心を出したか——キースは静かに口を開く。あくまで静かに。

「なるほどな」

相槌を打つだけで、きつと会話は流れる。

予想通り、シェリーはそのまま話し続けた。

「でも、かと言って憎いわけじゃない。彼らには彼らの事情があるし、何より……母さんは、笑ってるから」

「……なんだ、女のくせにマザコンかよ」

「別にそんな風には思っていないが……やっぱりこういう状況だと、親への思い入れは強くなると、思わないか？」

「……別に、誰だって本当は自分の親のこと大好きだよ。よほどのことがない限り、嫌いだなんて本気で思えないさ」

「お前も、親のことは大好きか？」

今度は、シェリーがからかうように聞いてきた。

キースは、急に立場が逆転し、不機嫌そうに口をつぐんだ。

「私ばかり話してずるいじゃないか。お前のことも何か話してくれ」

「俺は別に、話すことはない」

そう言うと、キースは勢いをつけて起き上がった。

シェリーは、そのキースの顔を下から見上げていた。

少しの間の後、シェリーもゆっくりと起き上がる。

「帰るか」

そうやって、シェリーは立ち上がって、体についた草を払うと、町に向かって歩き出した。

キースも、それについて静かに歩く。

何となくシェリーの背中を見づらく、空を見ながら歩いた。

今日は、魔物の気配を全く感じない、静かな夜だった。
星だけが、騒がしく明るく輝いていた。

R A N * * * 2 0 0 7 / 1 / 5 * * *

戦闘にて

ある日のこと。

「うわ！」

セイはエリスのおしりをさわった！

「おお！」

セイはシェリーのおしりをさわった。

だが シェリーはセイのおしりをさわりかえした！

「うわ、シェリーさん、なかなかやりますね！」

シェリーは ふてきなえみをうかべた！

「まあな」

「お前ら真面目に戦えー！」

キースは こうほうにむかってさげんだ！

「なんだー。キースさんも触ってほしいんですかー」

セイはキースのおしりをさわろうとした！

「ちがーう！」

が キースはセイをよけた！

「ちえ。何でよけるんですかー」

「避けるに決まってるだろうがー！！」

キースは セイにこうげきをしかけた――

「ギラ」

エリスはギラをとえた！

まものをたおした！ まものをたおした！ まものをたおした！
まもののむれをやつつけた！
けいけんちをえた！

「……これで経験値は平等なのか……」

またある日のこと。

キャタピラーが現れた。

「モンスターばかりで疲れたな」

シェリーはニフラムを唱えようとしたが

「うあああー!!」

シェリーは隣からの奇声に驚いて、呪文を唱えるのをやめた。
キースがシェリーの前に飛び出す。

そして、キースはキャタピラーを攻撃した。

「キ、キース?!」

仲間達は動揺した。

「うおおおー!」

キースはキャタピラーに攻撃をし続けている。

「ど、どうしたんでしょうか、キースは……」

エリスはシェリーに近寄って、小声で話しかけた。
シェリーも首をかしげるばかりである。

「……キースさん、なんかバーサクかかってますね」

セイが後ろから、ひょいと顔を出した。

「いや、これはドラゴンクエストだぞ。そんなステータス異常はない」

「何の話してるんですか」

「ああ、悪い。ついリアルな話を」

「さつきから、キャタピラーに出くわす時には、何かおかしかったんですよね」

エリスが過去の記憶をたぐり寄せるように話す。

「……もしかしたら、キースさんはイモ虫系が苦手なんじゃ……？」
セイもそれに乗るように話す。

「……なるほど」

シェリーは納得した。

と、彼らが話しているうちに、キースが全てのキャタピラーを倒してしまった。

「あ、キースさんがやつつけちゃいましたよ」

セイがシェリー達の間から、キースの様子をうかがった。

「キースさん」

セイがキースに呼びかける。

キースがゆつくりとセイ達の方を振り返った。

だが、その目は明らかにまだ正気には戻っていなかった。

「……………」

シェリー達に嫌な予感がはしった。

キースは——シェリー達に向かって、ナイフを構えて走ってきた。

「……！」

シェリー達は走ってくるキースをかわす。

三方向に逃げたので、キースはそこに立ち止まって辺りを見回した。

すると、キースはシェリー目がけて走ってきた。

「なぜ私なんだー?!」

シェリーは、そう叫びながらも、逃げてても無駄だと悟り、キースを迎え撃つ体勢に入った。

「シェリーさん、援護します!」

エリスは、メラをキースに向かって唱えた。

加減した小さな火の玉がエリスの手から飛び出し、キースの背中に当たる。

キースはわずかに体勢を崩した。

シェリーはその隙について、腰をさげてキースの懐に入り込み、腹に拳を力強く入れた。

シェリーは、旅立つ前にも鍛えていただけあって、腕っぷしはそれなりに強かった。

キースは、その場に倒れた。

「捕獲成功」

シェリーは、倒れこむキースを支えた。

エリス達が、キースの様子を伺うようにシェリーに近寄ってくる。

「大丈夫ですか?」

色々な意味をこめて、エリスはシェリーに聞いた。

シェリーは一瞬キースを見て、考える仕草をしたが、すぐにエリスの方を向いた。

「大丈夫だ。何とかいけるだろう。先に進もう」

そう言うと、シェリーは前へと進み始めた。

エリスも、戸惑いながら、シェリーの後ろをついていく。

セイはいつもどおりの笑顔でついていった。

その後、洞窟の奥に着く頃に、キースは目を覚ました。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
6
/
9
/
2
3
*
*
*

彼らは同じ空の下

「シェリーちゃん！」

突然呼びかけられ、シェリーは驚きつつ、ゆっくりと振り返った。他のメンバーも振り返る。

すると、そこにいたのは目立つピンク色の髪を噴水のように結んだ少女と、重そうな鎧に身を包んだ、見るからに戦士とわかりそうな青年だった。

「アリエル」

幼なじみの少女に、意外な場所で声をかけられ、シェリーは驚きに目を見張った。

アリエルと呼ばれた少女は、笑顔で跳ねるようにシェリーに駆け寄ってきた。

「奇遇だね。旅立ってたって聞いたけど、こんな所で会うなんて」「本当にな。てつきりお前はアリアハンにいますかと思っていたのに、どうしてこんな所にいるんだ？」

勢い余って、シェリーの両腕に飛び付いたアリエルを、シェリーは受け止め、優しく頭をなでた。

「シェリー、その子は誰なんだ？」

ここで聞かないときつと聞けなくなると感じたキースは、シェリーに問う。

「ああ、こちらは私の昔からの友人で、アリアハンの商人の娘でアリエルという。彼女も、両親の店を継ぐために商人の勉強をしているんだよ」

「はい、アリエルといいます！ 以後お見知りおきを！」

シェリーに言われ、アリエルはシェリーから離れ、キース達を見て笑顔で礼をした。

「この人達がシェリーちゃんのお仲間さんかぁ。なんか美男美女で眩しいね！ シェリーちゃんの好み？」

「ああ、ルイーダさんに相談して、私好みにもらったんだ。盗賊のキースに、魔法使いのエリス、遊び人のセイだ。私の一押しはこのキースだ」

「な?!」

シェリーはキースの背中に手を回し、少し前に出した。

キースは突然のことで、驚いてしかめっ面をしつつも、まんざらでもなさそうだった。

「うん、シェリーちゃんが好きそうな、でっかくてかっこいいお兄さんだ。でも私はこっちの魔法使いさんと遊び人さんと気が合いそうな気がするう」

急にアリエルに近寄られ、エリスは戸惑っていたが、セイはノリ気だった。

「僕もそう思います。よろしくお願いしますね」

「ね」

セイとアリエルは互いの両手をつかんで、軽く数回振った。

「お願いしますね」

アリエルはエリスの両手もつかみ、首を傾げた。

「あ、ああ」

エリスは戸惑いっぱなしで、なすがままだった。

「で、何でお前がここにいるんだ？」

一通り挨拶が済んだところで、手持ち無沙汰にキースの腕に絡ん

でいたシェリーが話題を戻した。

背負い投げのまねをしているシェリーに、キースはされるがままだった。

キースは、自分って何なのだろうという情けない気分になっているところで、この言葉を聞いて、やっと解放されたとほっとしていた。

旅立った日から、シェリーは無意識に待機状態になるとキースをいじるのだ。

しかし、アリエルはそんなことは気にせず質問に答えた。

「私も親の店継ぐつもりだったんだけど、あそこにいる戦士のエルロイさんに、新しい町を作るのを手伝ってくれて誘われたので、今そこに行く途中なんだ」

そう言ってアリエルは、向こうで控えていた戦士の青年を示した。自分のことを言われていると気づいた青年は、表情は変えずにシェリー達に軽く会釈をした。

——怪しい！

キースとエリスの考えは重なった。

幸せになれるという宗教の勧誘に似ている気がしたのだ。

連れていかれたが最後、そこは悪の巣窟で何をやらされるかわかったもんじゃない。

イメージ図まで二人はぴったりと合わさった。

「シェリー……」

キースは言おうか言うまいか迷いながらも、シェリーに声をかけようとしたが

「そうか。新しいものを作るというのもおもしろいことだと思うぞ。

機会があるなら色々な所に行くのはいいと思うよ」

笑みを浮かべて、アリエルの肩を軽く叩いた。

「僕も、アリエルさんならできると思いますよ」

セイもアリエルの背中に抱きついて言った。

セイのセクハラはいつものことだし、アリエルも気にしていないようなので、キースとエリスは軽く流したが、シェリーとセイがこ
うも勧めるのか理解できなかった。

だが、アリエルはシェリーの友人だ。

ここで今出会ったばかりの者が口を出すのはまずいだろうと思い、
二人は黙って見守ることにした。

「ありがとうございます。私頑張りますよー！ それじゃ、エルロ
イさん待たせちゃってるんで」

アリエルはそう言うのと、片手を上げてエルロイの方へ走っていっ
た。

「シェリー、いいのか？」

キースが静かな声で尋ねた。

シェリーはエルロイと共に去っていくアリエルを見ながら、口の
端に笑みを浮かべた。

「アリエルは、商人の娘だけあって、見た目よりもしっかりした子
だよ。彼女が信じたのなら大丈夫さ」

「少なくともキースさんよりしっかりしてると思いますよ」

シェリーに続いて、セイが悪戯っぽい笑みを浮かべて、シェリ
ーと反対側の腕をつかんだ。

彼のスキンシップは男女問わず行われる。

「何だつて!？」

キースは言われたことに対してと、触るな、という意味をこめて

セイのいる腕を振る。

セイは、わーい、と嬉しそうに横へ跳ねてそれを避けた。

「私を差し置いてセイのものになるなんて許さないぞ、キース」

セイにからかわれ、苛立たしげに顔を歪めているキースの腕に、シエリーが再び絡みつく。

キースはそのため、セイを追いかられなくなった。

「俺がいつお前の物になったんだよ！　っつか、こないだまでセイと俺を何とかしよう計画とか言ってたじゃねえか？！」

「いや、やっぱりお前は私がいじった方が楽しいからやめた」

「っていうか、俺はお前の玩具じゃねえー！」

端から聞いていると、やや疑われそうな会話をしている三人を、エリスはやや離れた所から遠い目をして見ていた。

「なんだか賑やかな知り合いだな」

シエリー達の騒ぎがまだ聞こえる位置を、アリエルとエルロイは歩いていた。

エルロイは少し後ろを振り返りながら、アリエルに話しかける。

「みたいだねー。私の幼なじみはあの髪の子だけなんだけど。楽しくやってるみたいでよかったよ」

アリエルはエルロイの隣を歩きながら、笑顔で言う。

「彼らは俺のことを疑っていなかったか？」

エルロイも歩きながら、表情を変えずに静かに言う。

「大丈夫だよ。疑われるようなことをしてるの？」

アリエルは言いながら、目線を上げてエルロイを見た。

「私はそんなつもりはない」

「だよー。エルロイさん騙すなんて器用なことできなさそうだな」

アリエルは前に向き直り、声を出して笑った。

エルロイは少しむすつとした顔をしていた。
そこで、アリエルはまた前方に見覚えのある人影を見つけた。

「あ、お兄さん達だ！」

またアリエルは見つけた人物の元へ駆け寄っていった。

エルロイもその人物を認め、アリエルについていく。

アリエルに呼ばれた二人の人物は、ゆっくりと振り返った。

短い黒髪に青いマントの青年と、空色の真つすぐな髪で身長と同じぐらいの大きな木の杖を持った女性だった。

呼ばれた相手を二人が見つけると、長い髪の女性の顔は笑顔になった。

「あら、アリエル。偶然ですね」

「ハイスさん、リーシェさん、お久しぶりですー」

アリエルは二人の前で急に立ち止まり、深く礼をした。

「エルロイも」

黒髪のハイスといわれた男性は、後ろから来るエルロイの姿を認めて呼びかけた。

「はい。お元気そうで何よりです」

ハイスは口の端だけを持ち上げて笑った。どこか皮肉っぽくも見える。

「それだけが取り柄だからな」

彼の声は、やけに冷たく響いた。

「アリエルもエルロイも元気そうでしたです」

空色の髪のリーシェという女性がアリエルとエルロイの顔を交互に見て言った。

ハイスの声にやや緊張した空気も、リーシェの声で柔らかく変化する。

「偶然といえば、さつきシェリー達にも会ったんですよ。まだこの町にいますから、お会いしたらいいんじゃないですか？」

アリエルの言葉に、ハイスの顔が強張った。

リーシェはハイスの空気の変化を感じたか、少し顔をうかがうように彼の方を見たが、変わらず笑顔でいた。

「私達は彼らにはまだ会えないんです。でも、教えてくれてありがとうございます」と

「リーシェ、早くこの町を出るぞ」

ハイスは言うど、さっさと道の先へ歩いていく。

「あ、はい。それでは、また」

リーシェも慌ててそれについていこうと、アリエル達に手を振り、ハイスが歩いていった方へ去っていった。

アリエルとエルロイは、少し顔を見合わせ、重くため息を吐いた。そして自分達も、行こうとしていた道を歩いていった。

R A N

2006/9/4

僧侶の武器（前書き）

私のDQ3小説のキャラ、全パーティーの僧侶を含みます。

僧侶の武器

リリスの場合。

「リリス」

「ん？」

クレイに名を呼ばれ、リリスは後ろを振り向いた。
クレイは、何とも複雑そうな表情をしていた。

「それ、買うの？」

「うん。お金は足りてるし、強い武器だし」

リリスが手にしているのは、金属の棒の先に鎖でつながれた物騒な棘のついた鉄球がついている武器だった。

名前はモーニングスター。

聖職者のために作られた武器だというが、その外見は、凶悪だった。

クレイはまさにそう思っていた。

「……ただ、その武器は、リリスが持つには、その……重くないかな？」

「あら、大丈夫よ。私これでも雑用とか結構してたから、腕力はあるし」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

「やっぱり回復だけじゃなくて、攻撃力もないとね。僧侶だし」

「……僧侶と攻撃力って関係あるの？」

「魔法使いよりは腕っぷし強そうな感じしない？」

「よくわからないんだけど……」

「とにかく！ これで少しは戦いが楽になるはずよ！」

リリスの笑顔で語るさまに対して、クレイはただ苦笑いを浮かべるしかなかった。

レイルの場合。

今日は皆がお揃いで買い物に来ていた。
今皆がいるのは武器屋である。

「レイルの武器は……」

アークは武器屋の品目を眺めていると

「あ、これです」

レイルは笑顔で、ある物を指し示した。

——モーニングスター。

「何かかつこいい名前の武器だね」

「ですよ。お値段ははりますが、一番強い武器ですし」

「どんな物なのかな？」

アークが店主に尋ねると、店主は奥にある品物を見せてくれた。

「……………」

一瞬、パーティー全員の顔が固まった。

まず気になるのは、思い切り力に頼って攻撃しそうな鉄球。

さらに、その鉄球についた、明らかに怪我を負わせることを目的
にしていると思える鋭い棘。

とりあえずこのパーティーでは僧侶のみが装備できるようだ。

だが、その外見は僧侶が装備するような代物には見えなかった。

「これはなかなか役に立ちそうですね」

だが、レイルは気に入ったようだ。

「……………」

この僧侶が言うと、洒落にならないので、皆一様に不安そうな顔をしてレイルを見た。

「アークさん、いいですよ」

だがレイルは、そんなこと気にしていないような笑顔で、アークに尋ねた。

「……う、うん……そうだね」

結局アークは、うなづくことしかできなかった。

クルスの場合。

アルザ達は、ある町の武器屋に来ていた。

そろそろ武器の強さも心許なくなり、武器を新調しようと思ったのだ。

「僧侶の武器はあるか？」

アルザが店主に尋ねる。

「はい、とりあえずこちらですね」

店主は全品目の台帳とは別のものを取り出して、アルザの前に広げた。

「一番強いのは、これか。えーと、モーニングスター？」

「はい、そうですね」

「見せてもらえるか。クルス、おいで」

「は、はい」

アルザに呼ばれて、後ろに控えていたクルスは慌ててアルザの隣に並ぶ。

他の者達も、後ろから興味深げに眺めていた。

そして、店主が奥から取り出して来たものを見て、少し面食らった顔をした。

「これが、そうか？」

アルザが一応確認する。

「はい、そうです」

店主は笑顔で答えた。

「これなら、セイラとかが装備した方が似合いそうだな」

アルザが何とはなしに、そう呟く。

「ちょっとー、それどういう意味？」

セイラは、ブーっと頬を膨らませて、すねた顔をした。

「特に他意はない」

アルザは気にせず、モーニングスターを手に取り、クルスに渡し
てみた。

「とりあえず、僧侶用らしいから、お前が装備できるはずだ。持っ
てみる」

「は、はい」

クルスはそつとモーニングスターを受け取った。

そして、棒の方を片手で持ち、少し上下などに動かしたりして、
感触を確かめていた。

「どうだ？」

「いいと思います」

クルスは笑顔で答えた。

その笑顔と手に持つてる武器は、合っているようには見えなかつ
たが。

「そ、そうか、お前がそう言うなら、いいんだろうな。店主、これ
を貰おう」

「ありがとうございます」

ふと見ると、クルスは嬉しそうに武器を軽く振り回していた。

少し、その顔が、危険な雰囲気を漂わせていたのは、皆気のせい
と思いたかった。

R
A
N

*
*
*
2
0
0
6
/
9
/
2
3
*
*
*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2395t/>

僕らは同じ空の下【DQ3パーティー3rd】

2011年8月7日03時15分発行